

令和6年度企画展

赤松宗旦と 利根川図志

『^{とねがわすし}利根川図志』は、江戸時代末の安政期に下総^{しもうさのくに}国布川^{ふかわむら}村(現茨城県利根町)在住の開業医、^{あかまつそうたん}赤松宗旦によって刊行されました。利根川という河川に関わる自然・地理・歴史・伝承などについて挿絵付きでまとめられており、当時を知るうえで大変貴重な資料です。



『利根川図志』全6巻（当館蔵）

I 著者 赤松宗旦について

（1）初代 赤松宗旦

江戸時代末、赤松家には「宗旦」を称する人物が三人おり、『利根川図志』の著者は二代目です。初代は、二代目の父親で名前を赤松宗旦恵といいました。宗旦恵は宝暦7年（1757）に遠江国（現在の静岡県西部）に生まれ、後に江戸に出て医者としての修行を積んだようです。天明6年（1786）に、現在の茨城県土浦市に移住しています。寛政8年（1796）からは、下総国の布川村（現在の茨城県北相馬郡利根町布川）で暮らしました。宗旦恵は、医業の傍ら俳句や挿花^{そうか}などをたしなみ、文化人としても知られていたようです。

（２）二代目 赤松宗旦

二代目は、名を赤松宗旦義知といい、文化３年（1806）に下総国布川村に生まれました。５歳の時に布川村から千住に移りますが、８歳で父親の宗旦恵を亡くし、母親の実家である吉高村(現在の千葉県印西市吉高)の藤崎家に身を寄せています。青年期を吉高村で過ごすことになった宗旦義知は、

１１歳で同村の医者、前田宗珉に入門します。

天保９年（1838）に生まれ故郷の下総国布川村に移り、医師として開業しています。医業の傍ら私塾を開き漢学及び国学を教えていました。



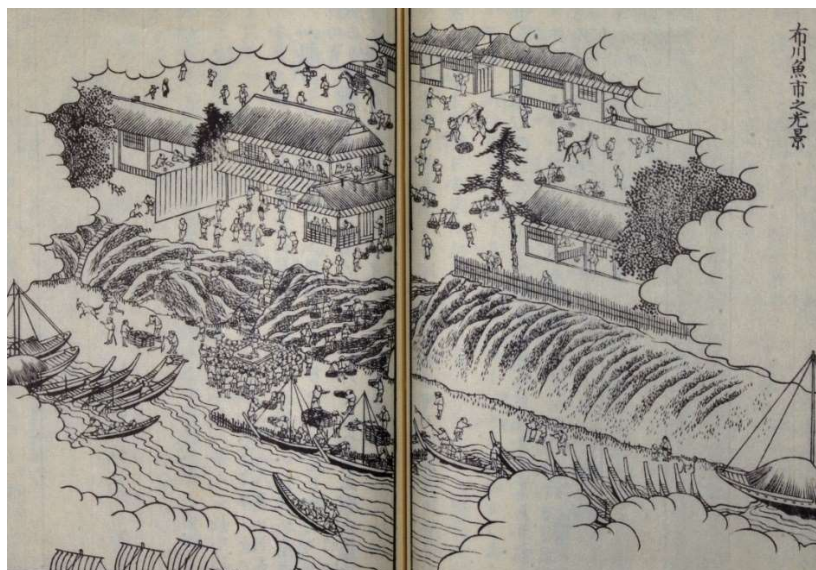
赤松宗旦旧居(茨城県利根町)

また、父親の宗旦恵と同じく書画・俳諧などに親しみ、文人として利根川流域の医者や学者等とも交流があったようです。（以降、宗旦義知は宗旦と記載）

（３）布川村

宗旦が３０年以上暮らし、医業を営みながら『利根川図志』を執筆した布川村は、舟運の河岸として栄え、多くの船が行きかう場所でした。

宗旦は『利根川図志』のなかで、布川村の寺社や物産、祭礼などについてページを割いて紹介しています。



布川魚市之光景

『利根川図志』 １巻より



ツクマイ図

『利根川図志』3巻より

Ⅱ 『利根川図志』刊行への道のり

(1) 文人としての宗旦

江戸時代後半、利根川流域は舟運で栄え、^{かしどんや}河岸問屋などが財を成していました。経済的な豊かさは、豊かな文化へとつながります。宗旦が生まれた布川村も河岸として大変栄えた地域で、多くの文化人が交流していました。宗旦もまた、医業を営むとともに書画や俳諧^{はいかい}などをたしなみ、近隣の医師、文人・学者などとの交流を深め、利根川流域ではその名を知られるようになっていました。『利根川図志』5巻には、宗旦が描いた挿絵が掲載されています。



赤松宗旦の挿絵

『利根川図志』5巻より

(2) 地方文人による出版

『利根川図志』の刊行よりも10年ほど前に、越後の雪国の生活等を描いた鈴木牧之の『北越雪譜』(天保8年(1837)、天保12年(1841))が出版され、評判になりました。また、高田^{ともしよ}與清の『鹿島日記』(文化5年(1808))や『相馬日記』(文化14年(1817))等、地方の文人による地誌や名所図会が流行しました。

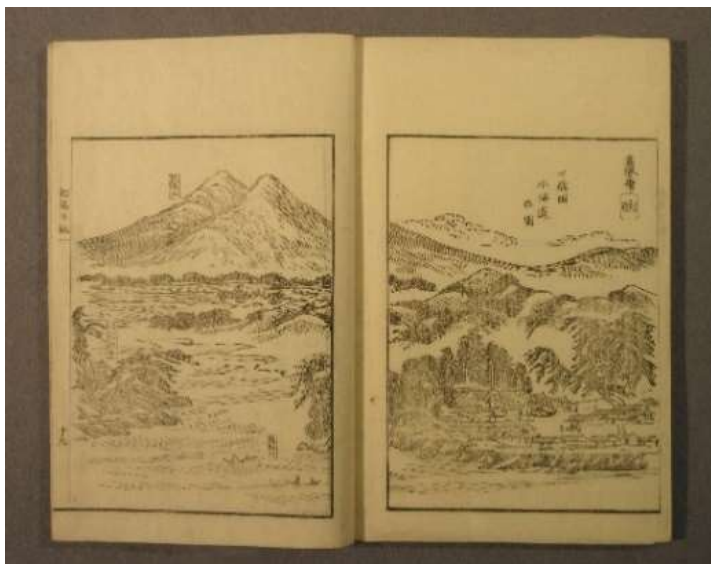


『北越雪譜』

画像提供：国立公文書館

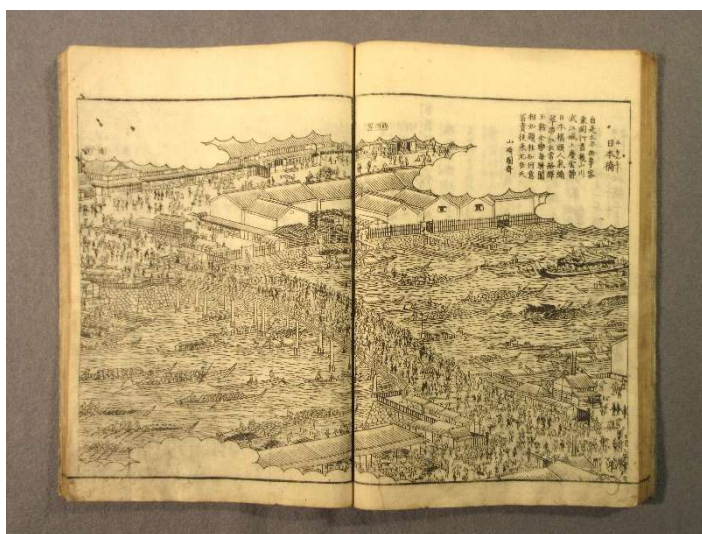
天保8年(1837)

天保12年(1841)



『相馬日記』当館蔵

文化14年(1817)



『江戸名所図会』当館蔵
天保5年（1834）、
天保7年（1836）



『鹿島日記』当館蔵
文化5年（1808）

（3）『利根川図志』の出版

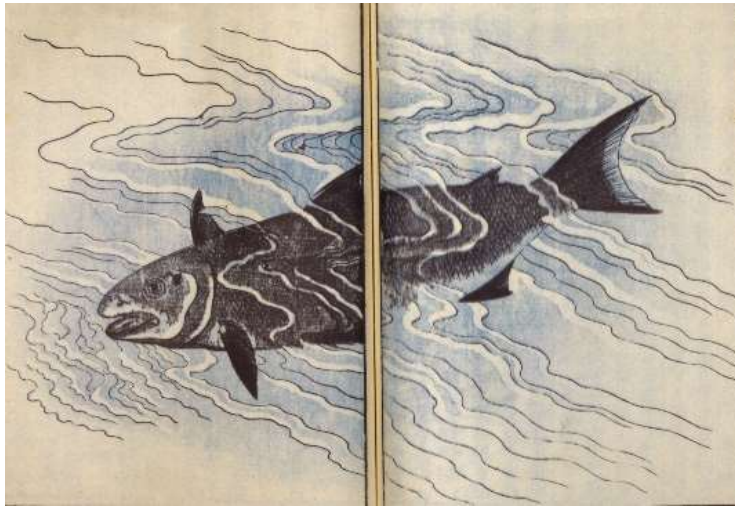
利根町に残されている『地誌編纂材料』には「安政元年甲寅年利根川図志草稿始」とあり、宗旦48歳の頃に原稿に取り掛かっていたと推測されます。

また、『利根川図志』の完成については、1巻の自序に「安政二年（1855）」とあり、一般的には、この記載をもって出版年とされています。しかし、宗旦が残した日記「笏記」や、幕府に提出した「開版願い」などから、必ずしも安政2年とはいえないようです。

Ⅲ 『利根川図志』を読む

『利根川図志』には、流域各地の旧跡にまつわる歴史や伝説、物産、植物や魚や虫、岩石など実に様々な記述があります。当館が所在する関宿についても城の歴史を詳しく紹介しているほか、周辺の伝説なども紹介されています。

【鱈魚（鮭）】



鱈魚（鮭）の図 『利根川図志』1巻より

『利根川図志』1巻の物産には、利根川で収穫される鮭について、「利根川の鮭は布川の鮭が最上であり、これを布川鮭という」と記載があります。



鮭地蔵

取手市の利根川河川敷の傾斜にあり、鮭を供養するために建てられたと伝わる

【蛇柳】



じゃ
蛇柳の図 『利根川図志』 2巻より

関宿城から、半里（約 2 km）程東に大柳があり、幹がとぐろを巻いているので「蛇柳」といわれています。

時々、この柳が北の方角に見えることがあり、夜行の船が方向を失うことがあるが。これは蜃気楼であると宗旦は記述しています。



大柳大龍権現神社

当館から 4 km 程利根川沿いを南東に向かったところにあります。これは「蛇柳」ゆかりの神社で、ご神体は、伐採された大柳であるとの言い伝えがあります。

【関宿城】

(『利根川図志』2巻より要約)

この城は古河公方の家臣である築田氏が築いたものである。築田氏はもともと下野国の人で、今も下野国に梁田郡梁田村がある。

築田氏は代々鎌倉公方に仕え、足利成氏が宝徳元年(1449)に鎌倉公方に就任してより、築田氏は結城氏と共に側近くに仕えるようになった。(その後関東管領上杉氏と鎌倉公方との対立から) 康正元年(1455)足利成氏は古河に移り築田氏を関宿に配した。弘治2年(1556)北条氏康は古河公方の足利晴氏とその子義氏を関宿に移した。このことは「鎌倉大双紙下巻」に記載あり。その後北条氏康・氏政は上杉輝虎(謙信)と争うが、この時築田氏は上杉方につき北条方に敗れた。このことは「関東古戦録」19巻に記載あり。

天正18年(1590)小田原落城により関宿城は松平康元に与えられた。このことは「房総治乱記」に記載がある。康元の墓碑は関宿台町の宗英寺にある。その後久世家の領地となり安永3年(1774)より今に至る。久世氏は善政を敷き万民は豊かで市は繁栄している。江戸川の両岸に内河岸と向河岸があり、問屋や船宿が多く大変賑やかである。江戸に行く旅人は向河岸から出るがその活況ぶりは他に例えようもない。



【古河晴氏朝臣墓】

(『利根川図志』2巻より要約)

宗栄寺のうしろの園にあり、高さ五尺(約1.5m)で土地の人は「^{ごしやうんと}御所卵塔」と呼んでいる。晴氏朝臣は永禄3年(1560)5月27日に亡くなり、法号は「永仙院殿系山道統」である。



晴氏朝臣墓

『利根川図志』2巻より

【高野敬仲】



「朝顔」鳳梧画
当館寄託

『利根川図志』2巻に、「鳳梧」という絵を好む桐ヶ作の眼科医についての記述があります。

「鳳梧」とは、眼科医として活躍した高野家の3代目敬仲の雅号です。



高野家で使われていた医療用具
当館寄託

Ⅳ『利根川図志』その後

(1) 続編への準備

宗旦は、『利根川図志』刊行後すぐに後編にとりかかったと思われ、草稿が残されています。しかし、残念ながら宗旦が急逝したため刊行はかないませんでした。

(2) 『利根川図志』と柳田国男

柳田国男は、布川で医院を開業していた長兄のもとで暮らした時期に『利根川図志』を読み、その面白さに惹かれました。後に柳田国男は、『利根川図志』の岩波文庫での復刻に係ることとなりました。